

日本マス・コミュニケーション学会第 36 期第 5 回研究会（メディア史研究部会企画）

「<西から>広告の歴史を考える：萬年社（大阪）を中心に」

日時:2018 年 3 月 16 日(金)16:00~19:00

場所:関西学院大学大阪梅田キャンパス K.G.ハブスクエア 1406 教室（アプローズタワー14 階）

[https://www.kwansei.ac.jp/kg\\_hub/access/index.html](https://www.kwansei.ac.jp/kg_hub/access/index.html)

報告者：加島卓（東海大学）

討論者：竹内幸絵（同志社大学）、難波功士（関西学院大学）他、『広告の夜明け』（思文閣出版、2017 年）執筆者数名

司 会：石田あゆう（桃山学院大学）

企画の意図：

今日、われわれが日々よく目にする広告の多くが、東京発であることはよく知られている。広告制作会社にテレビ局、新聞社や出版社、インターネットといったマス・メディア、そして印刷やシステムといった技術集団まで、その多くは「東」に集中している。それは広告をめぐるメディア史研究にも適用され、東京を中心に考察されることが「あたりまえ」であった。本研究会では、そうした「あたりまえ」を、商都大阪を牽引してきた広告代理店、萬年社の残した資料・業績を振り返り、東京を中心に考えられがちな広告研究とは異なる広告史の可能性について検討する。

萬年社は、大阪の商業都市としての凋落を象徴するかのようになり、1999 年に自己破産している。2017 年 12 月に竹内幸絵・難波功士編『広告の夜明け——大阪・萬年社コレクション研究』（思文閣出版）が出版されたが、その執筆者らは、萬年社が廃業したことで「発見」された資料や、その残された出版物からそれぞれの論文執筆を行った。同書は個別論文集ではあるものの、その共通の問題関心は、編者の竹内が指摘しているように、「広告黎明期における東京と大阪には、今では考えられないほどの均衡した関係があった」（「はじめに」6 頁）ことにある。同書刊行を手がかりとして、これまでの広告史を再考する機会としたい。

すでに編者の竹内を中心に 2009 年から萬年社の残された資料の整理がすすみ、大阪広告データベースとして「萬年社コレクション」が公開されている（大阪市立大学 <http://ucrc.lit.osaka-cu.ac.jp/mannensha/index.php>）。萬年社をめぐる共同研究は、同資料を使って行われており、今後の広告資料研究の一端を示すものともなっている。広告資料を通じたメディア史研究の可能性についてもあわせて検討したい。

明治期日本で広告業が始まった当初、今ほどその社会的職業威信は高くなかった。そんな時代に広告業者たちはどのようにしてその地位を築いていったのか。そのプロセスにおいて大阪の萬年社が果たした役割は少なくない。萬年社についての考察は、これまでその創業者の高木貞衛を中心になされてきたが、同書刊行によって、大阪萬年社の広告代理店としての企業活動も明らかにされている。

「西」からみた日本の広告活動の歴史をひもといていく研究会としたい。